



# ひ さ は ら 原



**先** 月号の寺野から、さらに井細川をさかのぼると松生原である。ここも寺野と同じく、井細川を挟んで南北に細長い地区で、古くは、井細川六ヶ村の一つであった。江戸中期に編さんされた地誌「土佐州郡志」や、元禄期の記録によれば「松曾原（ひさはら）村」とある。それより約100年後に編まれた地誌には「村民ヒサハラ村といふは、ソ・サ同韻なるゆへ也」とあり、松曾原と書くが、民衆は「ひさはら」といつていたという説が有力のようである。

何れにしても「松」の文字は、この井細川上流一帯が、太古の昔から上質のヒノキが育つ山々であったことを物語っている。ここ松生原よりもさらに上流の折合から南川口まで、切り出した材木を運搬するトロッコが走っていたことは南川口の回でも記した通りである。このトロッコの軌道設置作業には、松生原地区の住民が大勢参加した。また、松生原地区から他の地区への「嫁入り」に、このトロッコを利用することも数多くあったという。

松生原地区の住民は山と生きてきた住民とも言える。もちろん、谷間の狭い土地を懸命に切り開き、農地を作り守ってきたのであるが、近代になっても山との関わりはやはり深く、その典型として、松生原には今も狩猟をする人が多い。一方、農業について言えば、山間の農地で生計を立てていくために、これまで実に多くの挑戦をしてきた。その一つが「サツキ」の栽培である。昭和30年代から50年代にかけて行われたサツキ栽培は、県内外にも広く知られ「ここに来れば、珍しい品種がある」と、多くのから注目されたという。

産土神は、天津彦根命を祀る松生原神社。また、地区には禅宗・松曾山正持院と号する正善寺という寺があった。正善寺は、戦国期には「昌前庵（しょうぜんあん）」といい、廃仏毀釈より前の幕末には退転したようである。

この地区は山間であるため、昔から交通の不便な地区であったが、現在には井細川を挟んで東に町道、西に県道が並行して走り、地区民の生活に仕事にと活躍している。

ここ松生原地区には43世帯、80人が暮らしている。



学校跡は現在、地区の集会所となっている

## 町のうごき

| (6月30日) | 人口      | 前月比 | 出生       | 死亡     | 転入   | 転出     |
|---------|---------|-----|----------|--------|------|--------|
| 男       | 8,070   | 2   | 男 4      | 10     | 13   | 5      |
| 女       | 8,926   | -10 | 女 3      | 14     | 8    | 7      |
| 計       | 16,996  | -8  | 計 7      | 24     | 21   | 12     |
| 世帯数     | 8,475   | -8  | (6月中の届出) |        |      |        |
| 窪川地域    | 12,029人 |     | 大正地域     | 2,382人 | 十和地域 | 2,585人 |

**お詫びと訂正**  
7月号の人口前月比に誤りが、ありました。  
【正】 【誤】  
(5月31日) 人口 前月比 前月比  
男 8,068 -20 -2  
女 8,936 -17 1  
計 17,004 -37 1  
世帯数 8,483 -12 17  
ご迷惑をおかけしたことをお詫び申し上げます。

## 四万十川の水質状況

|          | 適正値(mg/l) | 7月16日  |
|----------|-----------|--------|
| リン酸      | ≤ 1.0     | 0.164  |
| 硝酸       | ≤ 0.5     | 0.603  |
| アンモニウム   | ≤ 5.0     | 0.126  |
| アニオン活性剤  | ≤ 1.0     | 0.25   |
| 化学的酸素要求量 | ≤ 10.0    | 測定範囲以下 |

調査：大正（吾川）  
資料：四万十高校自然環境部